

## メッセージアウトライン

### コリント人への手紙 第二1:1～7 「苦難と慰め」

パウロは先にコリント人への第一の手紙を書き送ったが、問題はなかなか改善されず、パウロに反対する者たちは依然として勢いを保っていた。それゆえパウロは反対者たちの誤解や中傷に対処して、どうしても教会を平和と秩序に満ちたものとする必要があった。そのため彼はこの第二の手紙を書き送ったのである。

第一の手紙はエペソで書かれたが、この第二の手紙はマケドニアのピリピで書かれたと思われる。

[1-2]「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロ、および兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカヤ全土にいるすべての聖徒たちへ。私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように」 (神とイエス・キリストが同格であることに注意。)

ここでパウロははっきりと自分のキリスト・イエスの使徒としての権威を打ち出している。彼は自分で勝手に使徒と自称しているのではなく、それは神のみこころによるのであった。ここでは特にテモテの名が連名であげられている。これは先に彼がコリントに使者として遣わされて彼らも良く知っていたからであろう。→ I コリント 16:10 ここでは彼らの上に恵みと平安が祈り求められている。ここでの恵みとは特に、救われた者が、その救いの完成の時に至るまでのすべての道のりにおいて与えられる神の一方的な恵みのこと。→ I コリント 1:8、ピリピ 1:6

平安とは単に静かな状態のことではなく、神の恵みによって勝ち取られ、与えられた心の状態。それは私たちがこの世の患難や苦しみのただ中で勝利を得る秘訣でもある。→ヨハネ 14:27、16:33

[3-5]「私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。神は、どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができます。それは、私たちにキリストの苦難があふれているように、慰めもまたキリストによってあふれているからです」 ここでパウロは神を賛美しほめたたえる。神はそのひとり子イエス・キリストをこの世に送り、私たちの罪を十字架上で贖ってくださった慈愛と慰めの神である。「慈愛」とはあわれみと思いやり、「慰め」とは強めること、支えることを意味する。これは聖霊に対して与えられている「助け主」(ヨハネ14:16)という名と同じ起源のことば。気落ちし倒れそうになっている者を強め支えてくださるのが慰めの神であり、助け主である聖霊の働きである。

キリストに従う時に苦しみがある。→使徒 14:22、II テモテ 3:12 しかしその苦しみがあふれる時、慰めもまたキリストによってあふれるように与えられるのである。世の苦しみ悲しみは、絶望や死に至らせるが、キリストに従う時にもなう苦しみや悲しみは豊かな慰めが与えられ、喜びに変えられていく。信仰者はこのようにしていただいた神の慰めをもって他の人を助けることができるのである。

[6]「もし私たちが苦しみに会うなら、それはあなたがたの慰めと救いのためです。もし私たちが慰めを受けるなら、それもあなたがたの慰めのためで、その慰めは、私たちが受けている苦難と同じ苦難に耐え抜く力をあなたがたに与えるのです」

この苦しみとは、福音を伝えることにともなう迫害や苦しみのことであろう。福音伝道の結果、苦しみに会ったとしてもそれがコリント人たちの慰めと罪よりの救いにつながるなら、その苦しみは役に立ったのである。福音を伝えるパウロたちが苦しみの中で神から慰めを与えられるのならば、コリント人たちもまた同じ慰めを苦しみのただ中で与えられるのである。これは神からの力である。

[7]「私たちがあなたがたについて抱いている望みは、動くことはありません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めをもともにしていることを、私たちは知っているからです」

パウロとコリント教会の間には今まで述べられてきたような苦しみと慰めによる堅い結びつきがあるので、コリント教会の中にどんな問題が起こってきても彼らに対する望みは動くことはないと言ったパウロは言うことができた。この望みとは先に見た「救いの完成する」ことについての望みのこと。

教会とは、キリストのために苦しみも慰めもともにするキリストのからだなのである。